

人の心に国境はない　　〓劉さんから渡されたバトン〓

浜松学芸中学校　二年　兒玉　拓之

「戦争は人間に『本当の自分』というものを、むりやり捨てさせる。別な皮をかぶらされ、心にある良心も、だれかに向ける優しさも、人間らしさのすべてを、自分という存在そのものを捨てさせる。」

これは、本の中でいちばん印象に残った言葉です。なぜなら、これこそが戦争の異常さと恐ろしさをよく表していると思うからです。国益という大義名分の前には、敵国の人間を虫けらのように扱うことも、殺すことさえも正しいことのように思えてしまう。本来あるべき人の姿ではなくってしまふ。しかも、ごく普通の人が、です。

しかし劉連仁は、人としての尊厳を踏みじられてもなお、人間らしく、心を失わず生きようと思いました。その尊い姿には涙が止まりませんでした。自分達を痛めつける日本人の監督の命さえも救い、極寒の地を逃げながら見つけた布団も、赤子の物とわかれば盗みませんでした。恐怖と不信、命が危険にさらされた状態で、敵国の人々を思いやるのが、いったいどれだけの人にできるでしょうか。自分が生きる意味を問い続け、一度は命を断つことを考えながらも、生き抜いて後世に何があったかを伝えようと、自らを奮い立たせた彼の強い精神力とその思いに、僕は心を打たれました。

正直なところ、僕はこれまで中国人に対して良い感情を持っていませんでした。たびたび報道される尖閣諸島の問題、先日の南シナ海問題、観光地でのマナーの悪さ、他国の文化の盗用等々、何と厚かましく卑劣な国民なのだろうと思っていました。しかし、この本を読んで、

僕は表面的にしか物事を見ていなかったことに気づかされたのです。そして、国家と人間個人とは、必ずしも同じではないということ、また、過去の戦争が今もなお外交関係に影を落としている現実に、改めて目を向けるようになりました。

まず前者についてですが、劉さんは中国人にひどいことをした日本人を心底憎んだはずなのに、その一方で、「私の一生を通して最もうれしいことは、本当に正義感ある日本の友人と交わったことだ」と、発見されてから後の日本人との交流と友情に感謝しています。このことから、たとえ国同士が敵対し、国策という名のもとに不本意なことがあったとしても、本来人間に宿っている温かい心に国境はないのだと改めて感じました。そしてまた僕自身も、劉さんのような立派な中国人がいたことを知り、中国人への見方が変わりました。

次に後者についてですが、何年前かに、中国の漁船が日本の領海に侵入したため、日本側が中国人の船長を拘束するという事件がありました。明らかに中国側に非があるのに、一般の中国人に街頭インタビューしたところ、大多数が日本側を非難したそうです。当時、僕はまだ小さかったので、後に聞いた話ですが、中国という国は情報操作をして、国に有利な情報しか国民に流さなかったり、学校では、日本に敵対感情を植えつける教育をしたりしているとの事でした。国益のためには手段も選ばないのかと、その時は中国の在り方をあさましく感じましたが、それにしてもなぜそんな関係になったのか、中国と日本とは古代から文化交流してきたはずですが、もしかすると、中国が日本を敵対視するのは、戦後の謝罪が十分になされなかったことによるものかと、この本を読んで思いました。しかし、賠償という形ではないにせよ、日本は中国に対して多額の支援はしてきました。中国が経済的に豊かになった今もそれは続いていて、赤字国日本がそこまでする

必要があるのかという声も国内にはあると聞きます。また、中国や韓国が日本に戦争責任を追究し続けるのは、もつとお金を出させるための国策だとする見方もあるようです。外交上の駆け引きについては、今の僕にはよくわかりません。双方には、それぞれの立場上、言い分があるのかもしれない。しかし、このままいがみ合っていていいわけがありません。劉さんはその生涯をかけて、同じ歴史を繰り返さないために、中国人と日本人とが共に努力しなければならぬと説いたのですから。

今、僕達にできることは何だろう。国家を動かす力はなくとも、個人レベルで相互理解の輪を広げていくことなら可能ではないでしょうか。例えば、戦争について正しい知識を得られるよう、様々な立場から書かれた本を読む。中国人との文化交流を通し、互いを知る努力をする等。以前、日本が韓流ブームに沸いた時、“文化は時に政治の壁をも越える”と言った人がありました。一つ一つはささやかな試みでも、身近な所から徐々に意識が変わるなら、平和に一步近づけるのでは、と思います。劉さんの思いをしつかり受けとめ、次の世代につなぐこと、それこそが僕達の使命だと思います。そして僕も劉さんのように人としての心を大切に生きたいです。

書名 生きる 劉連仁の物語

著者名 森越 智子

発行所 童心社